

## 学術情報

## 第5回 東京女子医科大学神経懇話会

日 時：昭和63年11月25日（金）午後5時より

場 所：東京女子医大 中央校舎1階会議室

開会の辞 福山 幸夫（小児科）

司会 原 美智子（小児科）

1. カルバマゼピンによって、てんかん発作が増悪したと考えられた症例の検討

○林 北見・宮本晶恵・岡田典子・須加原信子・福山幸夫（小児科）

2. MRIにおける側頭葉の解剖について

○柿木良夫・小野由子・小林直紀（神経放射線科）

3. 側頭葉てんかんの外科治療

○河村弘庸（脳神経外科）

4. てんかんを伴う家族性振戦症の兄弟例

○山本健詞・大澤美貴雄・柴田興一・小林逸郎・丸山勝一（神経内科）

〔特別講演〕

司会 福山 幸夫（小児科）

てんかん症候群分類の意義

国立療養所静岡東病院（てんかんセンター）

院長 清野 昌一先生

閉会の辞 丸山 勝一（神経内科）

1. カルバマゼピンによって、てんかん発作が増悪  
したと考えられた症例の検討

（小児科）

林 北見・宮本 晶恵・岡田 典子・  
須加原信子・福山 幸夫

てんかん治療中に、カルバマゼピン（CBZ）を与薬することによって、既存の発作が増悪し、脳波上も悪化傾向を示した症例を経験した。その臨床的特徴、脳波所見について、文献的考察をまじえて報告する。

症例は0歳10カ月から5歳までの5症例であり、分類上は乳児重症ミオクロニーてんかん3例、特発性局在関連性てんかん1例、症候性未決定てんかん1例であった。発作型はいずれも複雑部分発作であり、脳波上も局在性要素を示していた。CBZの併用、増量に伴って発作回数の増加、発作強度の増悪を認め、脳波上も突発性異常波の増悪、特に棘徐波複合の出現、広範化が認められた。4例はCBZの減量によって症状改善し、うち2例はVPAによって、また1例はESMによってさらに改善傾向を示した。他の1例はMCT食により改善した。

薬剤選択にあたって、臨床発作型だけでなく、脳波所見、基礎病態にも留意する必要があるだろう。

2. MRIによる側頭葉の解剖について

（神経放射線科）

柿木 良夫・小野 由子・小林 直紀

MRIはその特長に骨によるartifactがなくsagittal, coronal, axial像が得られるという断面の自由性がある。特にT<sub>1</sub>強調SE像はCSFとbrain tissueのcontrastの良好性より脳の解剖学的構築を正確に描出できる利点がある。MRIは特に後頭蓋窩や側頭葉の正確な画像診断に非常に有用である。

今回、我々はてんかんを主訴としてMRIを施行した症例について、特にT<sub>1</sub>強調SE像を用いて側頭葉の解剖を検討した。側頭葉の詳細な解剖を提示し、またX線CTと比較して症例を供覧する。

3. 側頭葉てんかんの外科治療

（脳神経外科）河村 弘庸

CT、脳血管撮影などの検索では器質的な病変の認められなかった側頭葉てんかん22症例に対して anterior temporal lobectomyを行ない下記の事項について検